

秋晴れの続いた週末、丹後の海で潜った。この時期にしては渾りがきつく、コンパスを見ながら慎重に泳ぎ進む。前方にオーバーハングした絶壁が目に入る。丹後の海では、陸上のダイナミックな景観そのままに、海の中でもこうした地形が多い。壁沿いを泳ごうと近づいてみて、我が目を疑つた。壁と見たものは壁ではなく、カタクチイワシの大群だった。群れがあまりにも濃密でしかも巨大であるため、砂地から立ちはだかる壁のよさに見えたのだ。魚群は

カタクチイワシ
太陽をも隠し、その下に入ると昏な暗い。大拳にして動物プランクトンをこしとり、そして大量のフンを出すため、水も濁っていたのだろう。群れの外側ではブリやサワラが徘徊しており、群れからはぐれた魚を狙つている。なかなか群れの中へ突っ込んでは行けないようだ。

マイワシとは別の種類で、体は細長く、口が情なく垂れ下がっているのが特徴だ。舞鶴ではタレクチと称され、煮干し餌になる。確かに弱々しい。

大学院時代から群れ行動の研究をしていて、正直疑問に思つていたこと

がある。小さな魚がいく

ら集まつたところで、大きな魚を威圧できるのだろ

うか、ということだ。

しかし群れがこれほどま

でに巨大であると、確か

カタクチイワシ

太陽をも隠し、その下に本能的に畏怖を覚え

る。

カタクチイワシは、近

年幻の魚となりつつある

「パリスケッチ」を連載

した中村禮子さんが作つ

てくれたカタクチイワシ

のマリネは絶品だった。

口をあんぐりあけて大

海をさまよいながら成長

し、そして他の魚たちの

餌になる。確かに弱々し

京大水産 実験所 益田 玲爾

若狭湾水中散歩

⑯

(じやこ)の材料として大量に流通する。そのままで食卓においても、汁のだしによしだが、個人的にはお好み焼きの生地に濃い目のじやこだし

というのは譲れないポイ

ントだ。さらに、本紙で

まじつてもよし、みそ

汁のだしによしだが、個

的にはお好み焼きの生

い魚ではあるが、海の生

て欠かせない存在だ。そ

のまま食卓において

なん魚の大群に出遭い、

のなかに我が身を置く悦び

もある。



伊根町泊港沖の水深10メートルで撮影されたカタクチイワシの大群の一部